

教育方法としてのヒップホップ ～Hip Hop Based Education～

追手門学院大学教育開発センター 馬場洸志
横浜国立大学大学院教育学研究科 倉本哲男

Hip Hop as Pedagogy ～Hip Hop Based Education～

Takeshi Baba*, Tetsuo Kuramoto**

*Center for Educational Development, Otemon Gakuin University / **Graduate School of Education,
Yokohama National University

1.はじめに

日本における昨今のフリースタイル・ラップ・バトルの流行により老若男女にヒップホップ文化が広く認知され始めている。ヒップホップ (Hip Hop) とは、ラップ、DJ、ブレイクダンス、グラフィティ¹の4大要素から構成される「文化」であり (KRS ONE, 2009)、1970年代にアメリカのニューヨーク (サウス・ブロンクス) で誕生した。この文化が日本に流入し始めたのが1980年代であり、40年近く経過した今日において、ラップに関しては、フリースタイル・ラップ・バトル人気に火が付き、フリースタイル・ラップ・バトルのテレビ番組が放映されるようになったり、ラップを用いたテレビ・コマーシャル²も散見されるようになった。ダンスに至っては、ブレイクダンスを含むストリートダンスの競技者人口が600万人にもものぼり (ストリートダンス協会, 2021)、平成20年の学習指導要領改訂に伴い、中学校の保健体育においてダンスが必修化されるに至った (文部科学省, 2008)。このように、日本の若い世代を中心に広がりを見せるヒップホップだが、本場アメリカではヒップホップを用いた教育手法が確立され普及し始めている。本研究では、アメリカで普及し始めているヒップホップ型教育 (Hip Hop Based Education [以降 HHBE]) を日本に取り入れる可能性を模索することを目的に、HHBEの教育理論とその実践を概観する。

2.ヒップホップの歴史とヒップホップの本質

ヒップホップが誕生した1970年代のニューヨークは、恐ろしいほどの財政危機下にあり、中流・上流階級層の郊外への流出が続出していた。これに伴い、大都市圏内の各地に経済機能が完全に停止した地域がいくつも出現し、アフリカ系アメリカ人やヒスパニック系アメリカ人といった低所得者層がそのような地域に取り残された。このような荒廃した地域では、いくつものギャング組織が台頭し、暴力沙汰やドラッグの問題が蔓延していたが、一方で、他の地域から隔絶されたサウス・ブロンクスでは「時代を先取りしたクリエイティビティ」(ヒップホップ) が生まれていった (ジョージ, 2002)。

このヒップホップの黎明期において、ヒップホップの発展と、今日におけるヒップホップの本質を創り上げていったのが、「ヒップホップの生みの親 (Godfather of Hip Hop)」と形容されるアフリ

カ・バンバータ (Afrika Bambaataa) である。1970 年代当時、バンバータは、ブロンクスの巨大ギャング組織の一つであるブラック・スペース (Black Spades) に所属していたが、ラッパー、DJ、ブレイクダンサー、グラフィティ・アーティスト、その他のホームボーイ (地元の仲の良い友達) から構成される「ズルー・ネイション (Zulu Nation)」という組織を立ち上げ、ギャングらによる犯罪と喧嘩の無意味さを繰り返し主張するようになっていった (ジョージ, 2002)。バンバータ率いるズルー・ネイションの活動により、拳を交えた暴力的な争いをするのではなく、ヒップホップの要素を用いて戦うことが提唱されていった歴史があり、ヒップホップにおいて、ラップやブレイクダンス、DJ などのフリースタイル・バトルが行われるのもその歴史的所以である。このような黎明期におけるバンバータらの活動を経てヒップホップ文化が栄えていき、今日に至るのである。

ラップには攻撃的な歌詞が散見され、不良文化を美化するギャングスタ・ラップなどのイメージが先行されるため、世間的にヒップホップそのものに対して暴力的な印象が持たれるが、ヒップホップの誕生から今日までの発展を支えてきた KRS ONE (2009) はヒップホップの本質を「平和 (peace)、愛 (love)、団結 (unity)、楽しむ (having fun)」と定義づけている。

3. ヒップホップ型教育 (HHBE)

(1) HHBE とは

HHBE とは、ヒップホップの要素を用いた教育および研究の包括的なフレーズであり、正課・非正課の教育活動にて取り組まれるヒップホップの要素を用いた教授法である (Hill, 2009)。ヒップホップの誕生地であるアメリカで普及し始め、実践事例も数多く報告されている (Morrell & Duncan-Andrade, 2002; Duncan-Andrade & Morrell, 2005; Hill, 2009; Emdin, 2013; Love, 2015)。なお、ヒップホップを活用した教育手法は、Hip Hop Pedagogy (O'Connor, 2016)、Hip Hop Education (Emdin & Adjapong, 2018) などと呼称される場合もあるが、本稿では後述する Hill (2009) の実践事例に依拠し、Hill が呼称する HHBE を用いる。

ヒップホップは4つの要素から構成されると上述したが、その4つの中でもラップは他要素に比べ、群を抜いて市場規模が巨大である。Billboard (2019) の調査によると、2018年のアメリカ音楽市場の消費において、ラップは全体の25.6%と約3分の1を占めており、同年のアルバム売上 (ストーリーミングも含める) においても、上位10個中7つのアルバムがラップのアルバムとなっている³。この市場と比例するかのごとく、HHBE で取り上げられる実践もラップを用いたものが圧倒的に多い (Love, 2015)。これら事例において、Emdin (2013) の高校の科学の授業での事例は広く知られている。この実践は、科学に興味・関心を持たない高校生に、ラップを通じて、同科目への興味、やる気を向上させるといった取り組みである。この授業に参加している生徒は、同科目に関連する用語を用いてラップの歌詞を書き、他生徒と競い合うというものである。この実践の鍵は、同科目に関連する用語を用いて歌詞を作成する際、その用語の意味を調べ、その意味をしっかりと理解していなければ、用語間の関連性や、歌詞全体の一貫性 (ストーリー性) を深めることができない点である。よって、生徒は歌詞を完成させるために、科学用語を勉強する、すなわち科学に対する学習動機が向上するという構造になっている。

(2) HHBE の背景理論

HHBE の教育理論的背景となっているのが、文化的関連教育 (Culturally Relevant Education) である。文化的関連教育とは、人種、民族、言語など、多様な文化的背景を持つ児童・生徒に対応するための教育理論であり、アメリカにおいて人種的マジョリティ (白人) が中心となったカリキュラムや教育内容の中で、マイノリティの児童・生徒の文化を学習内容にうまく関連づけるという点に主眼が置かれている。同教育理論は Culturally Appropriate (Au & Jordan, 1981)、Culturally Congruent (Mohatt & Erickson, 1981)、Culturally Responsive (Cazden & Leggett, 1981)、Culturally Relevant Pedagogy (Ladson-Billings, 1995) など、様々に呼称されてきたが、これらを総称して文化的関連教育 (Culturally Relevant Education) と呼称されるようになった (Dover, 2013; Aronson & Laughter, 2016)。

これらの理論研究の中でもとりわけ著名な研究が Ladson-Billings (1995, 2009) の Culturally Relevant Pedagogy (Teaching) である。Culturally Relevant Pedagogy は「知識、技能、態度を授けるために (児童・生徒のアイデンティティを形作る) 文化的関連物⁴を用いて、児童・生徒が知的、社会的、情緒的、政治的に能力を発揮できるようにする教育学」(Ladson-Billings, 2009, p.20 [筆者訳]) と定義づけられている。

上述したとおり、ヒップホップはアフリカ系アメリカ人やヒスパニック系アメリカ人といった人種の中から誕生した文化であるため、「HHBE=アフリカ系・ヒスパニック系アメリカ人」のためのものと曲解されてしまうかもしれない。しかし、ヒップホップは複数の国の文化に適合し、地域事情に合った形でローカライズされてきているため、HHBE は人種や民族に関係なく適応可能であるとも論じられている (Love, 2015)。つまり、若者文化としてヒップホップが定着した日本において、児童・生徒・学生の「文化的関連物」であるヒップホップを教育に取り入れる有効性が高いと言える。

4. アメリカにおける HHBE 実践事例

(1) 対象実践と選定理由

本稿で取り上げる実践事例は Hill (2009) の事例である。本事例を取り上げた選定理由として、他書籍は複数の実践が掲載された編著であるのに対し、単体の実践が書籍化されたのが著者のものが最古であるため、著者が 1 年通して取り組んだ実践が詳細に記載されているため、本事例が妥当であると判断した。

(2) 実践概要

本事例は、フィラデルフィアにあるハワード高校 (Howard High School) での取り組みである。同校の全生徒数 (実践当時) は 1200 名であり、その人種割合はアフリカ系が 41.5%、アジア系が 26.8%、白人が 24.4%、ラテン系が 6.9% となっている。18 歳以上の生徒が高校卒業資格を得るためにデザインされた放課後正規課程プログラム『トワイライト・プログラム (Twilight Program)』が取り込まれており、開始当初は上述した目的であったが、日中の普通課程に適合しない生徒⁵も参加してもよい形式へと発展していった。同校では 1 セメスター 4 ヶ月間の 2 セメスター制が採用されており、同プログラムは月～木曜日の 15:15~18:15 (1 時限 90 分の 2 時制限) に実施されてい

る。プログラムではスペイン語、英語、数学、科学、社会、選択科目など高校卒業に必要な科目が提供されており、Hill (2009) の事例は同プログラム内の英語に該当する。著者の取り組みは『Hip-Hop Lit』⁶と名付けられており、その受講者は20名となる。履修者の人種構成はアフリカ系11名、白人4名、アジア系3名、ラテン系2名、性別構成は男性8名、女性12名となり、年齢は16～19歳(22歳と23歳の生徒を除く)となる。

(3) Hip-Hop Lit のカリキュラム内容

3.1.授業の目的

本実践は「現実世界における上位概念 (dominant conceptions) から離れ、自身の経験、価値観、ヒップホップ・コミュニティの規範・慣例を表面的部分から本質へと転換させる読み書き能力を養成する」(Hill, 2009, p.18 [筆者訳]) ことを目的とし、ヒップホップ (ラップ) の教材を用い、ヒップホップ文化の観点による文学解釈と文学批評を試みる。

3.2.授業内で使用されたテキストと授業内で扱う文学表現技法

本実践では、教材としてラップの歌詞 (以降リリック) が使用されており、授業内で使用された曲の選定プロセス・基準は以下となる。

- ① いくつかのテーマに沿って200以上の曲を選定。
- ② 以下の基準によって削除曲を選定。
 1. 冒涔的な内容や、暴力を描写したもの。
 2. 差別的、女性蔑視、同性愛蔑視、異性愛主義の内容のもの。

このプロセスを経て選定されたテーマおよびアーティスト・曲目は表1となる。なお、本実践では文学としてのリリックに焦点を置くため、授業内では曲 (音楽) については一切触れず、教材の文学的価値に焦点を置くため、授業内ではラップ・アーティストを「著者 (authors)」、曲を「テキスト (texts)」と呼称する決まりとなっている。

また、各単元で扱ったテキスト内に活用されている重要な文学表現技法を紹介することとなり、各テーマで使用された文学表現技法は表2のとおりとなる。

表 1. 選定されたテーマと使用テキスト (曲目)

ヒップホップと文学のルーツ	愛	家族	ゲッター (Hood)	政治	絶望
Grandmaster Flash and the Furious Five “The Message”	Fugees “Manifest” (3rd Verse)	Outkast “Ms. Jackson”	Nas “Project Window”	Nas “I Can”	Notorious B.I.G. “Suicidal Thoughts”
Common “I Used to Love H.E.R.”	Common “Between Me You and Liberation”	Tupac “Dear Mama”	Jay-Z “Ballad for a Fallen Soldier”	Goodie M.O.B. “The Experience”	Jay-Z “Dynasty Intro”
Erykah Badu & Common “Love of My Life”	Mos Def “Ms. Fat Booty”	Jay-Z & Beanie Sigel “Where Have You Been”	DJ Jazzy Jeff & Fresh Prince “Summertime”	Nas “I Wanna Talk to You”	Goodie M.O.B. “I Refuse Limitations”
Sugar Hill Gang “Rapper’s Delight”	Common “The Light”	Common “Retrospect of Life”	Notorious B.I.G. “Things Done Changed”	N.W.A “Fuck tha Police”	Arrested Development “Tennessee”
	Eve “Love Is Blind”	Digable Planets “La Femme Fatal”	Wyclef Jean & Lauryn Hill “Year of the Dragon”	Dead Prez “They Schools”	

※アーティスト名は太字

表 2. 各テーマで使用された文学表現技法

ヒップホップと文学のルーツ	愛	家族	ゲッター (Hood)	政治	絶望
引喩 (Allusion)	観点 (Point of View)	情調 (Mood)	押韻構成 (Rhyme Scheme)	類韻 (Assonance)	寓喩 (Allegory)
シグニファイ ⁷ (Signifyin[g])	直喩・明喩 (Simile)	調子 (Tone)	中間韻 (Internal Rhyme)	子音韻 (Consonance)	反語法 (Irony)
隠喩 (Metaphor)	誇張法 (Hyperbole)	心象・形象 (Imagery)	擬人法 (Personification)	頭韻法 (Alliteration)	
筋・構想 (Plot)	主題 (Theme)	類推 (Analogy)	伏線 (Foreshadowing)	誇張法 (Hyperbole)	

3.3. 受講ルール

授業では扱うテキストを基に、受講者個人的意見や経験談を共有する機会が多いため、また、ラップ・リリックの表現的特徴も鑑み、以下のルールが設けられている。

- ・授業内で共有された個人的な話は授業外では他言しないこと。
- ・受講者全員の経験談や意見を尊重し、笑ったり、からかったり、反感を買うような行為をしない、極端に介入的にならないこと。
- ・テキストを読む、またはテキストについてコメントする時以外の「嫌悪的言葉 (hateful words)」の使用禁止 (黒んぼ[黒人蔑称のNワード]、おかま、あばずれなど)。

3.4.授業の構成

授業は毎回以下の通りに進行する。

①ジャーナル

授業の冒頭 10 分間、その日のトピックに関連した質問に対し、受講者の意見や経験を書く。受講者が記述している間、教員も同様に書く。

(質問例：愛とは何か？自身の地元を表すよい隠喩は何か？自殺を考えたことはあるか？など)

②ジャーナル共有

記述したジャーナルを全体で共有させる。共有者は基本的にボランティア制となり、受講者と同様に教員も共有する。

③グループ・リーディング

各自がテキストを黙読後、全員で音読する。音読の際は、最初の数行を教員が読み、その後はボランティア制で受講者が読んでいく。曲を聞かないため、グループ・リーディングを通し、受講者はテキストの（リリックの）複雑性を感じ取ることができる。

④読者反応 (Reader Responses)

テキストを読み、受講者の考えを明確にし、気づきを共有し、思考を整理するために実施する。読者反応を実施する際の手法は「記述反応 (writing response)」と「テキスト・レンダリング (text rendering)」の二通りである。「記述反応」とは、テキストの一部について、予め教員によって準備されていた質問に対して、自身の考えを記述する。この質問は、グループ・リーディング内でのコメントや受講者の感情によって決まる場合もある (質問例：テキストについてどう感じたか？この物語を読んだ時、どのような記憶を思いだしたか？など)。受講者の反応はクラス内で共有されるが、トピックの感度 (共有しやすいものかどうか) によって、共有必須かボランティア制かが決まる。

「テキスト・レンダリング」はテキストの読み手が、テキスト内で個人的に重要だと思う言葉、フレーズ、文章などを列挙しながら、テキストに対して反応を示す読者反応手法の一つである。本実践では、以下のような手順で実施されている。

- 1.各受講者が順に自分が重要だと思ったラインやフレーズを、教員や他受講者の干渉をはさむことなく読み上げる。

2.重要なラインやフレーズを数分間内省し、選定したラインやフレーズについて分析・議論していく。

⑤本題 (Formal Lesson)

読者反応が終了後、より本格的な教員主導のテキスト分析へと移行し、教員が議論したい重要な部分を紹介する。

3.5.課題と最終プロジェクト

課題は、テーマ (ユニット) ごとに取り組みられる「ユニット・プロジェクト」と、学期末に取り組みられる「最終プロジェクト」の2種類となる。ユニット・プロジェクトは、各ユニットの終わりに授業内で扱ったテキストを再読し、個人ないしはグループで指定された課題 (表3) に取り組む。課題終了後、クラス全体で共有し、課題を記述したシートを教員へ提出する。

表3. ユニット・プロジェクトの課題

ユニット	課題
ヒップホップと文学のルーツ	グループで、隠喩を用いた物語と (か)、最後にどんでん返しがある物語を作りなさい。
愛	授業で扱った全てのテキストからの一部を用いて、自分が愛をどのように定義するかを描いた詩を書きなさい。(韻は踏まなくてもよい)
家族	自分が Beanie Sigel と (か) Jay-Z の父親だと想定し、グループで、著者のテキストに返信するような手紙もしくはラップを書きなさい。
ゲッター (Hood)	ユニットで扱った著者たちと同じ押韻構成 (Rhyme Scheme) を用いて、自身の地元について述べなさい。
政治	Nas と Dead Prez の政治信念を用いて自分が大統領選挙に立候補すると想定し、グループで、『I Wanna Talk to You』と『They Schools』からテキストを引き合いに出しながら大統領スピーチを作成しなさい。
絶望	自分が助言コラムを書いていると想定し、ユニットで扱った著者たちと自分の会話を作成しなさい。なお、その際に以下を遵守すること。 <ul style="list-style-type: none"> 著者たちの疑問をテキストから引き出す。 助言するための自身の信念と意見を用いなさい。

最終プロジェクトは、受講者の文学的解釈力を図るための課題であり、授業最終日に実施される。受講者は以下の選択肢から自身が取り組む課題を選択する。

1. テキストを選択し (最低 20 行)、1~2 ページで分析しなさい。授業を通して身に着けた分析技術と専門用語を用い、テキストを選んだ理由 (半ページ以下) と、テキストが何について述べられたものかを説明し、重要な文学的用語やテーマを示しなさい (あなた、もしくはクラスメイトが授業内で触れたものも含め)。

- 2.オリジナルのヒップホップ・テキスト（最低 20 行）を自作し、それについて 1~2 ページで説明しなさい。この課題内には、このテキストを作成した動機、自身が用いた文学的方策、分析後の気づきについても記述しなさい。1~2 ページのレポートに加え、タイプしたテキストも添付しなさい。
- 3.教員と相談したうえ、上記に代わる自身の課題を完成させなさい。

3.6.評価

成績評価については、授業を通して執筆してきたジャーナルと、授業で取り組まれた課題（ユニット・プロジェクト、最終プロジェクト）によって評価される。ジャーナルは各授業内で執筆されたものを週末に三段階の基準で評価される。基準は、誠実さ・努力が感じられるものに該当する「チェック+」、努力が感じられないものに該当する「チェック-」、遅れて提出されてものに該当する「チェック」の三段階となる。授業で取り組まれた課題については A~F の基準で評価される⁸。

5.まとめと今後の展望

本実践のまとめとして、本実践の目的である読み書き能力や批判的思考力が向上しただけでなく、昼間の課程の授業では消極的な生徒が本実践内で積極的に授業に取り組む姿勢や、授業を通じた生徒間の強いコミュニティ形成が確認されている。「(2) HHBE の背景理論」内で、ヒップホップは複数の国の文化に適合し、地域事情に合った形でローカライズされてきているため、HHBE は人種や民族に関係なく適応可能である (Love, 2015) と述べたが、本実践ではアフリカ系・ヒスパニック系だけでなく、白人、アジア系の人種も参加しており、人種に関係なく HHBE が機能していた。また、HHBE はアメリカだけでなくイギリスやブラジルなどでも報告されており (Pardue, 2013; Brown & Nicklin, 2019)、欧米由来の野球やサッカーなどが日本人の日常に根付いたように、若者の日常生活にごく当たり前にヒップホップが存在する現代において、日本における HHBE の普及・浸透の可能性は十二分にあると言えよう。

ただ、日本においてヒップホップの教育実践に関する論文は、ヒップホップ・ダンスなどを扱った体育の実践に関するものが圧倒数であり、且つ HHBE に依拠したものではない。日本における HHBE を教育手法として確立させていくためには、先ず実践数を増やすことが不可欠となるため、その普及方法を模索していきたい。

注

- 1 グラフィティとは、公共性の高い場所に描かれた落書きであるが、単なるバンダリズム（破壊行為）としてではなく、エアロゾル・アート (Aerosol Art) として芸術的表現方法・社会的主張という側面もある (KRS ONE, 2009; 小林, 2009)。
- 2 キリン、トヨタ自動車、日本コカ・コーラなど大手企業がラップを商業的に活用している (エンタメ!, 2016)。
- 3 この市場消費の中には R&B も含まれているが、ラップの人気とともに R&B も「ヒップホップ化」が進んでおり、「Hip Hop R&B」などと呼称される。

- 4 翻訳引用した定義内の () は、文化的関連物 (cultural references) という語を分かりやすくするために便宜的に筆者が追加した。
- 5 子持ちの生徒、日中の普通課程の問題児、家計事情、日中の普通課程で暴力に悩む生徒など。
- 6 著書内には記載されていないが、同プログラムは読み書き能力養成を目的としているため、「Literacy (読み書き能力)」の「Lit」と、ヒップホップ・スラングの「Lit (やばいなどの表現)」という意味のダブル・ミーニングになっていると推測される。そして、このように一つの語に、二つ以上の解釈が可能な意味づけをするダブル・ミーニングはヒップホップ (特にラップ) の特徴でもある。
- 7 アフリカ系アメリカ人に使われる修辭的 (誇張した) 口語表現であり、意見やアイデアなどを述べる際の皮肉や間接的表現 (ThoughtCo, 2019)。
- 8 評価基準となるルーブリック等は同著に記載されていなかった。

参考文献

- Aronson, B. & Laughter, J. (2016). The Theory and Practice of Culturally Relevant Education: A Synthesis of Research Across Content Areas, *Review of Educational Research*, 86 (1), pp.163-206.
- Au, K., & Jordan, C. (1981). Teaching Regarding to Hawaiian Children: Finding a Culturally Appropriate Solution. In H. Trueba, G. Guthrie, & Au. K (Eds.), *Culture and The Bilingual Classroom: Studies in Classroom Ethnography*, Rowley, MA: Newbury.
- Billboard (2019). Drake's 'Scorpion' Is Nielsen Music's Top Album Of 2018 in U.S., 'God's Plan' Most-Streamed Song. (<https://www.billboard.com/articles/columns/chart-beat/8492663/nielsen-music-top-album-2018-drake-scorpion>, 2021.9.8)
- Brown, E. J., & Nicklin, L. L. (2019). Spitting Rhymes and Changing Minds: Global Youth Work Through Hip-Hop, *International Journal of Development Education and Global Learning*, 11 (2), pp.159-174.
- Cazden, C., & Leggett, E. (1981). Culturally Responsive Education: Recommendations for Achieving Lau Remedies II. In H. Trueba, G. Guthrie, & Au. K (Eds.), *Culture and The Bilingual Classroom: Studies in Classroom Ethnography*, Rowley, MA: Newbury.
- Dover, A. G. (2013). Teaching for Social Justice: From Conceptual Frameworks to Classroom Practices, *Multicultural Perspectives*, 15 (1), pp.3-11.
- Duncan-Andrade, J. M. R., & Morrell, E. (2005). Turn Up Radio, Teacher: Popular Cultural Pedagogy in New Century Urban Schools, *Journal of School Leadership*, 15, pp.284-308.
- Emdin, C. (2013). The Rap Cypher, the Battle, and Reality Pedagogy: Developing Communication and Argumentation in Urban Science Education. In Hill, M. L., & Petchauer, E. (Eds.), *Schooling Hip Hop Expanding Hip Hop Based Education Across the Curriculum*, New York, NY: Teachers College Press.
- Emdin, C., & Adjapong, E. (2018). #HipHopEd: The Compilation on Hip-hop Education: Hip-hop As Education, Philosophy, and Practice (Revolutionizing Urban Education: Hip-hop, Pedagogy, and Communities), New York, NY: Sense Pub.

- エンタメ！ (2016) . 『日本語ラップの人气が拡大 即興対決やCMで熱気増大』 .
 (<https://style.nikkei.com/article/DGXMZO07821740Q6A930C1000000/>, 2021.5.1)
- ジョージ, N. (2002) . 『ヒップホップ・アメリカ』 (高見展 訳) , ロッキング・オン.
- Hill, M. L. (2009). *Beats, Rhymes, and Classroom Life: Hip-Hop Pedagogy and the Politics of Identity*, New York, NY: Teachers College Press.
- O'Connor, C. A. (2016). *A Hip Hop Pedagogy: Effective Teacher Training for the Millennial Generation*, Ubiquitous Press.
- 小林茂雄 (2009) . 『街に描く 落書きを消して合法的なアートをつくろう』 , 理工図書.
- KRS ONE (2009). *The Gospel of Hip Hop: First Instrument*, Brooklyn, NY: powerHouse Books.
- Ladson-Billings, G. (1995). But That's Just Good Teaching!: The Case for Culturally Relevant Pedagogy, *Theory Into Practice*, 34 (3), pp.159-165.
- Ladson-Billings, G. (2009). *The Dreamkeepers: Successful Teachers of African American Children (2nd ed.)*, San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Love, B. L. (2015). What is Hip Hop-Based Education Doing in Nice Fields Such as Early Childhood and Elementary Education?, *Urban Education*, 50 (1), pp.106-131.
- Mohatt, G., & Erickson, F. (1981). Cultural Differences in Teaching Styles in an Odawa School: A Sociolinguistic Approach. In H. Trueba, G. Guthrie, & Au. K (Eds.), *Culture and The Bilingual Classroom: Studies in Classroom Ethnography*, Rowley, MA: Newbury.
- 文部科学省 (2008) . 『中学校学習指導要領解説 保健体育編』 .
 (https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/21/1234912_009.pdf, 2021.4.25)
- Morrell, E., & Duncan-Andrade, J. M. R. (2002). Promoting Academic Literacy with Urban Youth through Engaging Hip-Hop Culture, *The English Journal*, 91 (6), pp.88-92.
- Pardue, D. (2013). Who Are We? Hip-Hoppers' Influence in the Brazilian Understanding of Citizenship and Education. In Hill, M. L., & Petchauer, E. (Eds.), *Schooling Hip Hop Expanding Hip Hop Based Education Across the Curriculum*, New York, NY: Teachers College Press.
- ストリートダンス協会 (2021) . 『協会情報』 .
 (<https://www.streetdancekyoukai.com/about.html>, 2021.4.20)
- ThoughtCo. (2019). *What Signifying Means in African American Discourse*.
 (<https://www.thoughtco.com/signifying-definition-1691957>, 2021.9.6)